

自分の人生を私は生きていきたい

(原文は英語)

サナム・ブカリ (22 歳)

パキスタン・カイバル・パクトウンクワ州

国立 AKL 大学院大学イスラム学部

私が生まれた時、生まれたのが息子ではなく娘であることを母は嘆き、悲しみました。少し大きくなると、私は学校へ入ることができましたが、兄のように入ることが名誉である私立学校には行けませんでした。高校に入学すると、母の助言を受けて、父は私にブルカを着せました。ブルカに目や鼻や口を覆われた私は楽に呼吸ができなくなり、視界も悪くなりました。目の前の世界がブルカによってぼやけてしまったのです。顔を覆われることでアイデンティティーを奪われました。ブルカを身に付けたことで、私は周りにいるつまらない女性の群れに加わらなくてはならなくなりました。一言も口を利きませんでした。そして、ブルカは私の権利をもう一つ侵害しました。文化的考え方に反してブルカは私を守ってくれるのではなく、私の体に何千もの飢えた男性の目を引き付けたのです。私はこの文化に起因する飢えに耐えることができませんでした。私は消極的になりました。自分のために声をあげること是一切ありませんでした。

私の母は、私が学校に通うことに大きな不満を感じていました。「家にいなさい。学校に行くことに何の意味があるの。すぐに結婚して旦那さんに尽くすことになるのに」というのが彼女の主張でした。母はある意味正しかったのです。彼女は、私のことや私の将来を心配し、社会から私を守ろうとしていたのです。でも私は学校がとても好きだったため、母の言うことに従うことができませんでした。しかし、どうしても勉強を続けたいという私の主張は家族の命令に屈してしまいました。

大学入学後、私は勉強をやめなくてはならなくなりました。家に引き止められた私は、両親や兄弟姉妹に仕える家政婦のような気持ちになりました。私は家族の命令に従わなくてはならず、投獄生活を過ごす私を見て家族は満足そうでした。

1年という長い間、私は家族に奉仕しましたが、心の中では他者によって決められた自分の境遇について、常に考え、苦しんでいました。また、この期間中に私は一度も会ったことのない人と婚約させられました。どのみち私は「ハイ」と言うしかなかったため、受け入れました。

私にとって、それは奴隷のような無意味な生活で、納得のいかないものでした。私はこの生活に全く向いていなく、心が壊れかけていたのです。そこで、自分のために声を上げなくてはと思いました。私がやらなければ他の誰がやるというのでしょうか。私は家族の前で再び勉強がしたいと小さく震える声で主張しました。でも彼らは、私の真剣な主張を笑い飛ばしたのです。「1年も家にいたのに、今さ

らまた始めるのは無理でしょう」。家族の心の片隅にある情に訴えかけるよう、私は勇気を出して、より強く主張しました。でも、聞いてもらえませんでした。私が繰り返し主張しても、家族はそれを無視し、私が叫ぶと彼らは顔をしかめました。でも、私がそのしかめ面に抵抗し続けると、彼らは少しずつ私のことを考えてくれるようになりました。私は、消極的になっていたものの、女性の資質として最も望まれない「反抗的で無礼な娘」と呼ばれる覚悟で内なる自分を引き出しました。

私は婚約を破棄したいと考え、とても大変でしたが、なんとか解消することに成功しました。でも、多くの人からのひどい批判に耐えなくてはなりませんでした。そして、近年男女共学となった大学院に入ることができたものの、そこでも男性たちは、私たち女性を教室の中に閉じ込めようとするのです。女生徒にはスポーツを楽しむ機会は与えられず、男性に対して敬意と恥じらいを持って目を伏せることが求められ、女生徒が課外活動に参加することは推奨されていません。

私は自分のために声を上げます。そして、女性のクラスメイトたちにも、差別されることなく平等に扱われるよう自ら主張するよう勧めています。

私を委縮させていた恐れを私は克服しました。もう怖くはありません。私は私であり、一人の人間であり、正当な評価を受けたいのです。また、社会構造から私を抹消したい人々や自分の娘や姉妹、母親のことを恥ずかしいと思っている人々の考えを変え、私の意見を支持してくれるよう説得したいと思っています。私は、これまでに周りの考えを変えてきましたが、これからも変えていきます。